

## 太郎冠者Ⅱ益田太郎と「理蕃事業」

——『台湾土産 喜劇 生蕃襲来』の成立事情——

### 乙 重 昌 文

一、はじめに——喜劇作者・太郎冠者と台糖常務・益田太郎

太郎冠者、本名益田太郎（一八七五—一九五三）<sup>1</sup>は明治末年より喜劇作者として帝国劇場（以下、帝劇と略す）の舞台に年間数本の喜劇を提供していた。ヨーロッパ留学時代の豊富な観劇経験から産み出される軽妙洒脱な喜劇は大いに江湖の人気を博していた。しかし、益田太郎にとって喜劇作者はあくまで「趣味」である。三井財閥を財閥たらしめた益田孝の長男であり、三井財閥系の植民地企業、準国策会社<sup>2</sup>である台湾製糖株式会社（以下、台糖と略記）の常務取締役をつとめ、帝劇の役員をもつとめる傍ら喜劇を書く異才であった。

台糖は一九〇〇（明治三三）年に当時の台湾総督児玉源太郎の要請により、井上馨と益田孝が台湾に近代的砂糖工業を興す目的でつくった。益田太郎について書かれた当時の文章の多くが「益田孝男爵の長男」「富豪」「実業家」について書き起こし、「喜劇作者太郎

冠者」はその余技、富豪の「道楽」という評価に及ぶ。帝劇の看板女優、森律子を愛人にし、また、花柳界での桁外れの豪遊ぶりを伝えるエピソードにも事欠かない。<sup>3</sup>

益田自身、作劇については、台糖常務の肩書きで書いた文章に、「千差万別の人々を一堂に集めて一様に笑わせ様とすることは、難事の中の難事といわざるを得ない。／難事の中の難事と雖も、元来私の趣味であり、文化の発達に当然伴うところの喜劇を書くことは、私の無上の楽しみである。」と書く。後に帝劇の経営が松竹に移って以後は筆を折り、台糖の経営に専心し、社長に就任している。

大富豪の道楽という印象を与えたことは、太郎冠者に対する評価を芳しいものにしなかった。阿部次郎は「愚劣なる帝劇」と題して「最も厄介なるは多少の学問を持つて詩才なきに猶脚本を試みむとする富豪の徒である」と暗に罵倒している。<sup>5</sup>

今日、日本の喜劇史における評価は、大笹吉雄が「太郎冠者の喜

劇精神は浅草オペラの基層を成して、昭和初期頭のレヴュー式喜劇にまで水脈を引くと考えていい。喜劇作家としての益田太郎冠者の仕事は、こういう角度で再評価されてしかるべきではないか」と新たな評価の視点を打ち出し、高野正雄が自筆メモなど一次資料を駆使して評伝『喜劇の殿様 益田太郎冠者伝』<sup>7)</sup>を上梓し、帝劇女優を育成するなど演劇史に残した足跡を実証して後も再評価の動きは活発化せず、個別の作品についての先行研究はないに等しい。<sup>8)</sup>

本稿で取り上げる『台湾土産 喜劇 生蕃襲来』(以下『生蕃襲来』と略記)は一九一三(大正二)年五月一日から二五日まで帝劇で上演された。上演終了とともに趣味社から刊行され、さらに雑誌『台湾愛国婦人』の同年六月号に掲載されている。<sup>9)</sup>取材、上演、雑誌掲載の全てにわたって台湾総督府が深くかかわっている。後述するように当時台湾総督府が抵抗する先住民を「討伐」すべく進めていた「理蕃五箇年事業」を「内地」の大衆に知らしめるプロパガンダ劇の役割を担わされていた。

表題の「生蕃」とは、台湾先住民に対して清朝が付けた呼称である。帰順した先住民を「熟蕃」、帰順せず抵抗するものを「生蕃」と呼んで区別した。<sup>10)</sup>一八七一年(明治四)年の宮古島民遭難事件から台湾出兵に至る経緯の中で、日本国内にも「生蕃」についての関心が高まり、さまざまな情報もたらされている。その後、日清戦争によって台湾を領有して以後、台湾の抵抗を武力で平定する過程

は新聞報道も多く、川上音二郎はそのような報道を翻案した演劇を上演している。「生蕃」についても川上の『生蕃討伐』はすでに一九一一年(明治四四)年に大阪で上演されている。<sup>11)</sup>しかし、川上の劇は「生蕃」を直接取材して創作したものではない。太郎冠者の喜劇『生蕃襲来』は現地取材をおこない、なおかつ喜劇に仕立てたという点で、当時の文芸作品の中でも特別な位置を有している。新聞報道から高等小学校の教科書<sup>12)</sup>にいたるまで首狩の風習を持つ獐猛さ野蠻さを強調する「生蕃」表象の中であって、コミカルな「生蕃」像を表現したことは、その後の「生蕃」表象を考える上で重要な意義があるだろう。殊に「首狩の踊り」を舞台の上に八十人もの俳優を乗せて演じたことは当時の観客に強い印象を残した。<sup>13)</sup>

他の作品に於いて、喜劇作者太郎冠者は台糖の役員益田太郎と一線を画してきたが、この作品に於いては企業人としての活動のフィールドがそのまま喜劇の舞台となっている。登場人物も三井の幹部社員をモデルとしていたため、当初から「楽屋落ち」との評判が立つ太郎冠者喜劇の中でも特異なものである。本稿では、この喜劇の上演された一九一三(大正二)年、拡大した植民地経営を構想する日本における台湾をめぐる状況の中で、この喜劇が成立した背景を明らかにするとともに、太郎冠者によって表現されたコミカルな「生蕃」表象のその後の展開までを考察することを任としたい。

## 二、喜劇『生蕃襲来』の舞台—大料坂・角板山

はじめに作品の梗概を記す。

舞台は台湾北部。「蕃界」<sup>13</sup>に近い大料坂から角板山。樟脳を生産する三ツ木組殖林部に日本から「大切な御得意」一行がやってくる。客の中でも金満家、増尾老人は大の臆病者で、道中の軽便鉄道で「生蕃」に首を取られる夢を見て取り乱している。老人の二一歳の若妻君子は柔道の心得があり、旅行先に「ボルネオか西蔵を望んだんですがトウ／＼台湾の蕃界見物でお茶を濁す事に成った」とエネルギーを持って余して飛び跳ねている所謂「新しい女」である。君子は新婚旅行でありながら友人の静江を連れてきている。増尾老人はそんな君子に頭が上がらず、他の男に取られるのではないかと心配でならない。他の紳士連は増尾老人と女性達にもてる同行の桜木にあてられて、これに復讐しようと「生蕃」を粧って驚かす。

当時の劇評は皮肉を効かせながらも決して悪くはない。

竹の屋主人（饗庭篁村）は「朝日新聞」（五月四日）に「道楽劇 拝見野暮式会社」は成立たため形なり」と台糖と帝劇の重役をかねる益田太郎＝太郎冠者の喜劇を「道楽」と皮肉りながら、「表面は楽屋落ちを舞台で饒舌るに過ぎざる如くなれども退いてよく考えれば其の裏には台湾の風俗生蕃熟蕃隘勇<sup>14</sup>から討伐隊のこと殖林のこと等、参考品を陳列してまで、面白がらせて説明するという大事業あ

り、「よくも分からぬ翻訳劇を見て感服面を繕って居るよりは遙かに増しなり」と述べる。また、「宗五郎の蕃務警部が■<sup>15</sup>辞でなく本演説にて生蕃事情を説明するのが立派にて失礼ながら宗五郎といふ俳優をはじめて見付出したほど嬉しかりし」「皆々面白さうにて賑やかにて結構なり」と役者を評価する。しかし、「是では拓殖博覧会の余興を見たように」芝居を見た気分がしないと割り引く。

益田太郎が台湾を訪れたのは一九一三（大正二）年。一行七人は一月二九日に日本郵船の信濃丸で門司を出港、船中の余興に太郎冠者の喜劇『女天下』などを楽しみながら二月一日に台北に到着。一日から一六日まで喜劇の舞台となる北部の大料坂、角板山を訪問し、一九日に帰京の途に就く。<sup>16</sup>

一九一〇（明治四三）年には、大料坂に桃園庁の支庁が置かれ、角板山まで軽便鉄道が敷設され、その先のカウイランには隘勇線<sup>17</sup>がとおり蕃務官吏駐在所が置かれた。一九一二（明治四五）年七月には東宮の台湾行啓が決まり、角板山訪問も計画されていた。その機会は明治天皇の死によって実現しなかったが、この地には「蕃董教育所」が設けられ、「模範耕地」がつくられ、先住民に対して農業の指導が行なわれていた。<sup>18</sup>時代はやや降るが「角板山の蕃地には内地人に見学させるための生蕃がある」<sup>19</sup>と言う証言もある。太郎冠者の一行がこの時見学したのは、「模範耕地」を耕作し、後には「見学」用となる「生蕃」であったと思われる。やがて角板山は総督府にとっ

て「理蕃事業」のショーウィンドーになっていく。

台糖常務益田太郎の訪台の主要な目的は一九一一（明治四四）年と翌年、二年続きの風水害によって蔗糖が壊滅的被害を受けたことによる事業の立て直しであった。被害を致命的にした要因は被災後の病虫害の発生であった。これに対応するため、台糖は病虫害に強い高地苗圃を取得するべく台湾中央部にある埔里社製糖株式会社との合併をすすめていた。<sup>20</sup>ところが、自ら訪問し、喜劇の舞台となる台湾北部には同行する三井物産幹部社員にとっては関係の深い三井合名会社の樟脳事業の現場があったものの、一九一六（大正五）年に台北製糖株式会社を合併するまで台糖の施設はなかった。<sup>21</sup>台湾北部地域について経営者として将来的な展望は当然持っていたはずであるが、この日、太郎冠者が角板山を訪れた当面の目的は総督府から依頼を受けた喜劇の取材と考えるのが自然であろう。

### 三、喜劇『生蕃襲来』と「理蕃五箇年事業」

台湾は佐久間左馬太総督の下で「理蕃五箇年事業」が行なわれている真っ最中であった。

一九〇二（明治三五）年に平地の漢族系台湾人の抵抗を抑えることにはほぼ成功した総督府は、木材、樟脳などの資源開発に向けて、山地の先住民の制圧に方針を転換し、一九一〇（明治四三）年からは大規模な軍事作戦を伴う「理蕃五箇年事業」を実行に移す。

劇中、竹の屋主人を感心させた宗五郎の「本演説」は台湾の歴史から説き起こし、総督府の「理蕃事業」の説明に及ぶ長いものである。その役どころは夫婦で「蕃界」に十八年くらし、先住民の慰撫に従事して「角板山蕃社の蕃人からは丸で神のように思われて」いる蕃務警部吉川という設定である。

我総督閣下の理蕃の御方針は決して武力を主とする訳ではム（ござ）いません、我れに服する者には土地を与へ産業を奨励し婦人には機を教へ小児には教育を与ゆる等極力平和的に開発の道を講じつ、有り升が苟も我王威を憚らざるものは是れを討伐すると云ふ所謂武力の伴ふたる平和手段ではありませんが如何にせん彼等十二万人余りの蕃人中其半数六万人程は今尚抵抗を継続致し升為に明治四十三年以来毎年三百万円の予算を以て五箇年間に討伐を終る計画を立てられた訳であり升（略）文明国の戦争と違って正々堂々隊伍を組んで来るのでは無く善く天險を利用しては巧妙な狙撃をされ升ので丸で鉄砲の上手な猿と戦ふのと同様実に御話に成らんのです（以下略）

以下、「討伐」の苦勞を説明する詳細な数字まで入れた演説は総督府の監修をうかがわせ、この芝居のプロパガンダ劇としての側面をよく表している。

「演説」にもいうように「理蕃事業」の方針は慰撫策を取りつつ武力討伐を行なうものであった。しかし、焼き畑など粗放な農耕を

行い狩猟を主な生活手段とする先住民から銃を武器と見なし取り上げ、農業、養豚などをさせようという独善的な慰撫策は、激しい抵抗に直面した。帰順しない先住民居住地域を「隘勇線」と呼ぶ冊や鉄条網、地雷原で包囲し、これを「蕃界」と呼んで、多くの人命を犠牲にし莫大な資金を費やし、蕃務警察を主力に軍隊を加えて困難で苛烈な討伐作戦を展開した。

しかし、総督府の強引なやり方は、じつは国内世論にも決して歓迎されていなかった。

「理蕃」政策の背景には、台湾特産の樟脳の問題があった」と大江志乃夫は端的に指摘する。<sup>②</sup> 総督府は一八九九（明治三二）年から樟脳を専売品にした。三井は専売品の樟脳事業に深く食い込んでおり、三井合名会社は樟脳の払い下げを受けて造林事業に、三井物産は一九〇八（明治四一）年から樟脳の販売を委託されていた。<sup>③</sup> すでに当時、西村才介（南溟漁人）は「製腦業者、及、台湾総督府当該官吏との間には、一種付度しえられない情実が出来て居る」と製腦業者と「討蕃事業」の密接で不明瞭な関係を指摘している。

内地新聞の討蕃電報に「腦丁（樟脳労働者乙重注） 鹹首さる」の情報の、年年頻々たるから見ても、製腦業の安全でない事が、知れる。その安全でない製腦業者の爲、沢山の犠牲を惜しまず、隘勇線を進め、其うしては蕃人懐柔に尽瘁しつつ、其の後々々、製腦業を築かせくして、製腦業者に安全を与える台湾総督府の

討蕃事業に戦死する人が、現に一ヶ月に五十人は下るまい。<sup>④</sup>

新聞論調にも早くから批判的なものが目立っている。一九〇七（明治四〇）年五月二五日の「読売新聞」（東京）「社説」は「生蕃の猛獐なる」こと以上に「山岳溪谷、天然の限界」に阻まれた山間地開発の費用対効果に疑義を呈している。さらに同年十月一六日の「社説」では「討伐隊」には国費と正規の警察官、軍隊を投入せず、特許会社を設けて「兵勇」を募集させ、「内地の博徒、俠客の類」を雇い入れれば「内地に在っては遊手徒食の徒を減じ、台湾に在っては、比較的容易に生蕃征服の目的を達することを得て、富源開発の端緒茲に開けん」と主張する。国会での予算審議中、一九一〇（明治四三）年二月十日の「朝日新聞」（東京）の「社説」は「生蕃の首を取らんとして、却って文明人の首を取らるるが如きは、決して策の得たる者にあらず。（略）吾人は聊か危ぶむ所ありて細長的勦討方針を望む」と時間をかけた慎重な対応を求めている。この様な論調の中、佐久間総督は敢て五箇年事業を実行に移した。

五箇年事業は開始されて後も困難を極め、折から二年続けて未曾有の風水害に襲われた。佐久間総督も歳入の減少と、被害復旧にかかる歳出の増加で予算の組み替えが必要になるという苦況を吐露する。<sup>⑤</sup> 理蕃事業に対する「内地」の理解は喫緊の課題であった。

この地で樟脳事業を展開する三井合名会社にあっても「生蕃」による「首狩」の被害が続き、それを恐れる労働者の逃亡に悩まされ

ていた。太郎冠者らが訪れた前月にも隘勇、脳丁等十三名が犠牲になり、二月には隘勇一名が狙撃されている。劇中、治安情況の不安定な様子が描写されて「首狩」を面白可笑しく描くが、現実には深刻であった。まさに総督府の理蕃事業にとっても、三井合名会社の樟脳事業にとっても角板山は最前線であった。

刊行本と再録雑誌の「自序」に創作の目的を次のように記す。

生蕃に至っては今尚総督府に莫大な金と幾多の人命を犠牲に供させて居る、是等の人鬼を討伐又は教育し新たな富源を国家に提供せん為めに日夜生命を賭して勤務さるゝ当事者の苦心は実に多とせねばならぬ、然るに生蕃のみか此の新領土に関する国民の智識は頗る鈍い（略）故に著者は笑の内に彼の地の状態を内地人に紹介する目的を以て一場の喜劇を創作する事にしたが、扱困つたのは土人語及び生蕃語である、勿論観客に分らぬと言つて出放題も言へず又背景、大道具、小道具等は可成実物、或は実物同様の物を用ひたい精神から非常に苦心し（以下略）以下、協力を得た人物として、台湾総督府の内田嘉吉民政局長官、大津麟平蕃務総長、中川友次郎財務局長、高山仰税務課長以下、理蕃課警視など数名の名を挙げ、さらに台北三井物産支店長箕輪焉三郎、三井合名会社殖産部長星野政敏、以下台糖社員等の名を挙げて「諸氏の御尽力に依りて土語蕃語其他尽く必要品を得られた為に漸くして出来上がった」と総督府、三井関係者への謝辞を述べる。

ここで言う「土語（土人語）」とは漢語系台湾語、「蕃語」とは先住民の言語をいう。「土語」には漢字表記に片仮名で発音を付し、「蕃語」は片仮名で発音を表記し、ともに日本語訳を付している。

上演に際しては台糖から砂糖糖の差し入れ、総督府から台湾蜜柑の差し入れなどもあり、「内田民政長官は幾多の写真を参考として寄せ、総督府の蕃務本署よりは生蕃銃を送付し来たり背景も真に迫りしものを調整せり」と総督府も実態紹介に意を用いている。蜜柑は一九一〇（明治四三）年に角板山蕃童教育所の子供たちも植栽しており、総督府にとっても思い入れのある品だったのである。また、生蕃銃は山林での狩猟用に銃身を短くし、台座を加工して軽量化したもので、討伐隊を苦しめていた。劇場に陳列されて、竹の屋主人が見た「参考品」はこのようなものであったろう。

『生蕃襲来』が帝劇で上演されるのに先立って、台湾総督府から「理蕃事業」の責任者、大津蕃務総長が上京し、台湾関係の政財界人で構成する台湾倶楽部に於いて講演している。大津は「理蕃事業に對して余り内地から同情が得られなかった」と啓発不足への反省の弁を述べて、理蕃事業の現状と産業経済上の得失について詳細な説明を行なっている。時期、内容、政財界人を対象とするところから、一般大衆を対象とする喜劇と連動する啓発活動の一環であろう。

#### 四、拡大する植民地と喜劇『生蕃襲来』

この時期は日清、日露戦争を経て、新たな植民地を獲得し膨張した日本にとっても画期であった。

元号が「明治」から「大正」に替わった一九一二年（大正一）年十月一日から十一月二十九日まで東京の上野公園で「拓殖博覧会」が開催された。竹の屋主人が喜劇『生蕃襲来』をして「是では拓殖博覧会の余興を見たようで」と評したのはこのことである。山路勝彦によれば「この拓殖博覧会こそが、明確に植民地の存在を日本国民に悟らせた最初の機会であり、植民地の人物、風俗、産業などを組織的に展示した日本で最初の試みであった」<sup>23</sup>。続いて翌一三（大正二）年四月二日から六月一九日には大阪の天王寺公園で「明治記念拓殖博覧会」が行なわれている。この時期の二つの「拓殖博覧会」は広大な植民地を手にした日本のあり方を模索し、植民地帝国国民としての自覚を促そうとするものであった。喜劇の上演はこのような流れの中にある。

山路は「大正の初め、拓殖博覧会が開催されていた時期、帝都では一風変わった喜劇『生蕃襲来』という出し物が上演されていた。（略）この喜劇に登場するタイヤル族を「生蕃」として異形な存在に仕立て上げていく風潮は、当時の日本ではしばしば見られたことであった」と博覧会をとおして形成されていく「生蕃」像と喜劇『生

蕃襲来』との関係に注目している。以下、山路の指摘を踏まえつつ、両者の関係を見ていきたい。

「拓殖博覧会」の「趣意書」は明治期に成し遂げられた国土膨張の晴れがましさを謳う。

日清戦役ニ依リテ台湾ヲ領有シタル我国ハ、日露戦役ニ依リテ樺太ヲ領有シ、関東州ヲ租借地トシ続テ朝鮮ヲ併合シ、明治ノ聖代ニ於テ国土著シク膨張シ、茲ニ世界ノ一大殖民国ヲナセリ、（略）殖民政策ハ今ヤ我国ノ最モ重要ナル問題タルニ至レリ、（略）獨リ政府ニノミ依頼セス、国民ニ一致シテ之ニ当ラサル可ラス。ノ植民地経営ノ方法ハ（略）要スルニ富源ヲ開発シテ殖産興業ヲ盛ンナラシムルニアリ（略）故ニ植民地ノ経営ハ殖産興業ノ奨励ヲ主トセサル可ラスシテ、殖産興業奨励ノ上ニ於テ、本国人ノ殖民的進取思想ヲ喚起スル事最モ必要ナリトス<sup>24</sup>。

「本国人ノ殖民的進取思想」の内実は要するに植民地の資源開発、殖産興業をすすめるということである。朝鮮、台湾、北海道、樺太、関東州の植民地各地からさまざまな生産物が出品され、優秀者は表彰された。植民地を代表する華国策会社たる台糖の執行役員、益田太郎がここに於いて果たす役割は当然大きなものがある。台糖の砂糖と酒精はそれぞれ業績、品質を高く評価されて名誉金牌を受賞している。また、益田太郎も関わりの深い製糖企業のカルテルである台湾糖業連合会も「糖業者ノ一致ヲ図リ以テ斯業ノ發展ニ寄与ス」

として名誉金牌を受賞している。

しかし、いうまでもなく植民地経営の抱える課題は殖産興業にのみあるのではない。植民地の住民、さまざまに異なる所謂「人種」を如何に帝国内に包摂するのかがという困難な課題がある。

拓殖博覧会は「帝国版図内ノ各人種ヲ招来シテ親シク彼ラノ性格及生活状態ヲ観覽シ今後如何ニ彼ラヲ訓導スヘキカヲ研究スルノ機会ヲ内地人ニ寄与スル」として、会場の「新タニ設ケタル土人部落ニ收容」し、「観覽シ」、「研究スル」対象として「展示」した。

人類学者の坪井正五郎は博覧会会期中、会場に設けられた「観光館」で「明治年代と日本版図内の人種」と題する講演をした。彼が「明治年間に新に日本国民と認められる様に成つた種族は」と語り起し、「加はつて来た時の順に従つて」、「第一北海道アイヌ」から順に「第十朝鮮人」に至るまでそれぞれ解説し、「異種族が国民中に加えられるに至つたという事の如何に重大であるかがわかるでありませう」と結んだその講演に於いて、その重大性は伝わるものの、「異種族」をどのように「日本国民」として遇すればよいのかについての具体的な提案はない。この講演には博覧会主催者の「今後如何ニ彼ラヲ訓導スヘキカ」との戸惑いを共有する坪井の姿を見ることが出来る。

会期の半ばに開催された「人種懇親会」で坪井は司会をつとめた。会場は大臣、次官から紳商、学者、俳優、芸妓で埋め尽くさ

れ、坪井が「斉シク我至聖至仁ナル陛下ノ赤子ナリ日本帝国ノ国民ナリ斯ク一堂ニ会シ且ツ語り且ツ飲ム豈愉快ナラスヤ」と開式をつげた。<sup>(38)</sup>「我至聖至仁ナル陛下ノ赤子」と漠然とした同化政策、皇民化への方向を示しているとはいへ、台湾先住民に対する具体的な施策、研究は未だ手探りの段階にあるといつてもよかつた。総督府を中心に「生蕃研究会」が発足して機関誌「蕃界」が発行されるのも一九一三（大正二）年一月である。

喜劇『生蕃襲来』は殖産興業と先住民統治とを模索する日本の、以上のような状況の中で上演されたのである。総督府の内田民政局長官が拓殖博覧会に寄せた「祝辞」の中で「由来殖民地ノ実情ハ多ク世人ニ了解セラレス頗ル遺憾トスルトコロナリシモ今回本会ノ開催セラルルヤ内外人ノ注意ヲ喚起シ予期以上ノ成績ヲ収メ（以下略）」と述べるのは、太郎冠者喜劇に寄せた期待と軌を一にし、この喜劇の担った啓蒙的役割をも端的に物語っている。喜劇作者太郎冠者も植民地における準国策会社、台糖常務益田太郎のために一肌脱いだというところであろう。

## 五、二つの「生蕃襲来」——「生蕃」と「ニセ」「生蕃」

では、劇中で「生蕃」はどのように描かれたであろうか。

「読売新聞」の劇評では「生蕃襲来は棠屋落ちらしいから、或る少数の人が見たなら嘸、面白いに違いない。普通の見物もかなり腹

を抱えさせられたさうだ、松助の紳士増尾長清の滑稽には、そして蛮人の風俗には、笑ひを誘われぬではない」とある。

「生蕃」は序幕（其一）と二幕目に登場する。

序幕は「台湾蕃界カウイラン隘勇監督所の場（増尾長清軽便車上の夢）。隘勇線の鉄条網を前に蕃務警部渡辺熊夫と妻政子、蕃務巡查達に増尾老人が加わって月見をしている。その時突然、隘寮に火の手が上がり、「生蕃」が襲来する。監督所に乱入した「生蕃」と「激烈なる戦闘」の中、増尾老人が「見るも恐ろしき一人の生蕃に襟首をムンツと押へられ今や将に蕃刀の露と消えなんとす」という夢を見たところで序幕が終わる。まず最初の「生蕃襲来」であり、この喜劇全体の基調である「首狩」が提示される。

二幕目。舞台上は「台湾蕃界内角板山三ツ木組殖林部事務所を觀光団歓迎の爲に大食堂として準備」したという設定である。そこに増尾長清をはじめとした「内地」からの紳士、三ツ木組殖林部長押野正年と殖林部係員、蕃務警部吉川勇治と「同警部補（蕃人）タオガン、生蕃頭目アテヤイ、生蕃ユーカーン、蕃婦ヤーワイ、其外生蕃男女子供大勢」が登場する。

「角板山三ツ木組殖林部事務所」とは実在した三井合名会社の事務所に他ならない。「三ツ木組殖林部長押野正年」は前出の「自序」に名前のあがった三井合名会社殖林部長星野政敏がモデルであろう。この人物は大正八年に台湾製腦会社取締役に就任している。

舞台は「生蕃の歌（敵を誅首したる勇士を頭目の賞揚する歌）」を唄う「生蕃一流の首狩祝ひの踊り」で幕が上がる。

紳士達は「生蕃」に酒をすすめ、蕃務警部吉川の通訳で会話する。劇中に語られる「生蕃」の風俗には一見ふざけているように思えるものにも総督府の監修をうかがわせる裏付けがある。例えば、「蕃婦ヤーワイ」が何を好むかと訊かれて、針と糸を好むと答える場面がある。大正一年八月、宜蘭庁溪頭蕃ボンボン社では「蕃婦」から求められて教化事務嘱託花園道求の妻が裁縫を教えている。太郎冠者は劇中の随所に関係者から教示されたと思われる具体的事例を挿入して、観客に対する啓発の効果をあげようとしている。

紳士達の興味と話題はやはり「首狩」に集約される。

蕃務警部の吉川はこの地域に居住するタイヤル族の「獯猛頑強」ぶりについて「切た首の口から酒を注いで切口から血に混つて出るのを飲み升て」と説明する。非常に衝撃的なこの説明も「台湾総督府蕃務本署御認可」の『台湾生蕃種族写真帖附理蕃実況』に「首酒の式」<sup>33</sup>として写真を掲載して同様の説明がある。また「いくら帰順したからと云って詰り馴れたライオンか虎同様何時甚麽事からバクリと来るか知れやしません、外の物と違って首を取られちや見当が付きませんや」と増尾老人に語らせるのは、一度帰順した「生蕃」がその後しばしば抵抗に転じることが絶えなかった事実を反映している。

山路は「この芝居は、明らかにタイヤル族の野蛮さを揶揄した作品であった<sup>44</sup>」という。確かに、この喜劇の作劇のツボは、ショッキングな首狩、「獐猛頑強」な「猛獣」として表象される「生蕃」でありようと、舞台上で役者が演じる滑稽な演技との落差にある。そして、観客は「蛮人の風俗には、笑ひを誘われぬではない」と、「生蕃」の滑稽さを印象付けられて劇場をあとにしたのである。

しかし、役者の滑稽な演技はあるにせよ、先に述べたように喜劇を面白可笑しくするためにのみ作り上げた虚構はないといってよい。「土語」「蕃語」には意味の分からないまま観客は「腹を抱えた」ことが想像されるものの、決してでたらめではない。『台湾日日新報』（五月三二日）は坂東太郎の名で「東京だより」と題して劇評を載せ、「蕃語の正不正を別として、俄仕込の女優や、男優が、案外流暢に其を使ひこなしたる方は多とすべし」と評価する。上演ではそのまま発音したようだ。領台初期に於いて総督府は日本語の普及を基本としつつも、統治の必要から現場の下級官吏、警察官には台湾語学習を奨励した<sup>45</sup>。劇中、三ツ木組殖林部長押野正年は台湾人苦力と台湾語で会話する。三井の幹部社員も現場では台湾語を自在に使っていたことが分かる。大道具、小道具とともに植民地台湾の実情を「内地人」に正確に啓蒙しようとする太郎冠者の意思とともに、リアリスト企業家益田太郎の面目を示している。

加えて、太郎冠者が現地言葉にこだわった背景には明治二四年、

一四歳から八年間に及ぶイギリス、フランスでの留学経験があったのではないだろうか。彼の代表作に英語が話せない日本人がロンドンで繰り広げる喜劇『啞旅行』がある。この喜劇は小山内薫をして「国家を侮辱したものだ。（略）誣告罪に問うの価値が充分にある」とまで憤慨させている<sup>46</sup>。

この時代のヨーロッパで一四歳の日本人少年がどのような視線を浴びていたかを思うなら、彼が日本と日本人を突き放して見ることのできる感性を身につけ得たことも理解できるだろう。そのことは拓殖博覧会で好奇の目にさらされる「生蕃」に対する見方をも相対的なものにしたのではなかったろうか。

最終場面は二つ目の「生蕃襲来」である。紳士達は「生蕃」と服を取り替え、「生蕃」に扮して増尾老人たちを驚かさうと寝所を襲い、逆に柔道の技で君子婦人に首狩ならぬ首を締め上げられて、紳士の服を着た本物の「生蕃」たちから笑いものにされる。実は「生蕃襲来」という喜劇の喜劇たる所以はこの二セ「生蕃」がとっちめられるオチにあるといえる。紳士達、即ち三井の幹部社員は婦人達にコケにされ、「生蕃」と紳士達は立場が逆転し、相対化され、散々の目に遭って喜劇は終わる。「案屋落ち」と言われた所以である。

## 六、おわりに——コミカルな「生蕃」表象

山路勝彦は、拓殖博覧会から約二十年を経た一九三二（昭和六）

年三月十五日から二十五日間にわたって浜松市で開催された「全国産業博覧会」に登場したアミ族が本来アミ族の文化にはない「首祭」の踊りを踊っていることに注目している。山路は「先に紹介した喜劇『生蕃襲来』はタイヤル族の首狩を衝動的に扱っているので、台湾⇨蕃人⇨首狩という連想を日本の大衆に植え付けるのにおおいに貢献したことだろう。」とタイヤル族とアミ族との区別など無頓着に「蕃人」と「首狩」を結びつけ安易な連想のもとをつくったと太郎冠者を批判する。もちろん、「台湾⇨蕃人⇨首狩という連想」を流布したのは太郎冠者ばかりではない。「生蕃」の首狩はそれまでも扇情的に描かれ、教科書にまで取り入れられている。むしろ、山路の指摘の中で注目すべきは、アミ族の「首祭」の踊りが「一連の演目のなかに埋め込まれていて、他の多くのコメディアンとともに、コミカルな流れの一端を背負い込まれていた」ということの方ではあるまいか。「台湾蕃人の首祭」は浜松芸妓連の浜松踊、ジャズトウキョウ舞踏団のナンセンス・コメディなどとともに演芸館の余興の舞台に乗せられた。<sup>⑩</sup>

この時、「台湾アミ族」一行と舞台をともししたのは、後にコミックバンド「あざれたぼういず」で一世を風靡する川田義雄（川田晴久）を座長とする一座であった。川田はその前年に浅草の音羽座でレビュー歌手としてデビューし、川辺喜美夫とともに「ジャズ・オブ・トーキョー新劇レビュー団」を旗揚げして、東海道、北陸、朝

鮮、満州をめぐる旅回りを始めていた。<sup>⑪</sup> 博覧会主催者は「観覧者の印象」として、この二つの出し物を次のように評価する。

四月四日から出演したジャズ・トウキョウ歌劇団は流石に其の名に恥ぢなかつた、コメディーものもスケッチも実に軽快なナンセンスで高尚に偏せず野卑に墮ちず、背景出演共に奇抜で清新で近代人の心持ちをシックリと掴んでゐた。(略) / 十四日から二十三日までの二の替りも、依然人気をあつてゐた、此の間に台湾生蕃人ガヨウ・ブデン等を始め男女一行十一名の舞踏を加へた首祭り、豊年踊り等頗るグロテスクな演じ物ではあつたが、しかし未知の習俗を遺憾なく表現した。<sup>⑫</sup>

「台湾アミ族」一行がどのような経緯で呼ばれたか、また川田の一座と同じ舞台に立つに至る経緯はいま詳らかにしない。しかし、歌と踊りとコメディーで「軽快なナンセンスで高尚に偏せず野卑に墮ちず、背景出演共に奇抜で清新で近代人の心持ちをシックリと掴んでゐた」という浅草仕込のレビューと「首祭」の踊りが一つの舞台に立ったことは、大笹吉雄が「太郎冠者の喜劇精神は浅草オペラの基層を成して、昭和期初頭のレビュー式喜劇にまで水脈を引く」と評したことを思い出すまでもなく偶然とは言えないだろう。「首祭」の踊りという「グロテスクな演じ物」をコメディーに取り込み、江湖の笑いの対象にして強い印象を残したのは外ならぬ太郎冠者な

のである。前記大笹の評言をもじって「太郎冠者の喜劇精神は「生蕃」認識の基層をなして、昭和初期の「生蕃」表象にまで水脈を引くと述べることもあながち的外れではないように思えるのである。

「昭和」にいたって、拡大した「大日本帝国」の版図はすでに南洋諸島を含んでいた。

浜松の「全国産業博覧会」の前年、一九三〇（昭和五）年には石田一松のコミックソング「酋長の娘」が「踊れ踊れどぶろくのんで明日は嬉しい首の祭り」と歌って大ヒットしていた。歌の舞台となっているのは「マーシャル群島」である。首狩りをする「蕃人」のイメージはさらに拡大して、「首狩」蕃人「台湾」南洋という連想」が形成されていたといえそうである。

#### 注

- (1) 本稿に於いては台糖常務益田太郎と喜劇作者太郎冠者の名を立場によって書分ける。両者の立場が重なる記述に於いては太郎冠者を優先する。
- (2) 「準国策会社」の概念は久保文克『植民地企業経営史論』準国策会社の実証的研究（日本経済評論社、一九九七年一月）に負う。
- (3) 益田太郎について実業界側からする同時代の紹介文献は多いが、ここでは次のものをあげておく。

石山賢吉『現代重役論』ダイヤモンド社、一九二六年六月  
経世社編『現代業界人物集』経世社出版部、一九三五年七月  
喜劇作者と企業人としての全体像を描いた仕事には次のものがある。  
中川清「太郎冠者を名乗った実業家」益田太郎の生涯「白鷗法学」

第7号、一九九七年三月

高野正雄『喜劇の殿様益田太郎冠者伝』角川書店、二〇〇二年六月

- (4) 「笑ふ芝居をつくる楽しみ」「太陽」第三十巻第五号、一九二四（大正十三年）年五月

(5) 『三太郎の日記』第二、岩波書店、一九二五（大正四）年二月「四五八頁」

(6) 『日本現代演劇史大正・昭和初期篇』白水社、一九八六年七月「六八頁」

- (7) 注3 高野と同じ

(8) 『生蕃襲来』は上田正行が取り上げているが作者は不明としており、「生蕃」と表象された台湾「通俗小説、大衆小説、冒険小説の位相」『台湾愛国婦人』の研究、本文・研究編』國學院大學、二〇一五年二月、柳瀬善治はその「書評」に於いて作者が益田太郎であることを指摘して、この作品の演劇史から見た検討の必要性に言及している（『日本文学』第六四巻第一号、日本文学協会、二〇一五年一月）。

(9) 『台湾愛国婦人』一九二三（大正二）年六月、第五五巻。掲載本文は下岡友加氏よりコピーを提供していただいた。なお本稿の本文引用は初刊（趣味社、一九二三（大正二）年五月、国会図書館デジタルコレクション）に掲載を用いる。なお、再録にあたって「増尾老人・松助・押野部長（梅幸）阿久津（宗之助）君子夫人（宗十郎）静江（徳子）桜木（長十郎）」と上演時の配役が記載されている。

(10) 台湾先住民については大正の末に「高砂族」という呼称が与えられたが、一般の日本人は昭和初期に至るまで「生蕃」と呼び慣わしていた。台湾先住民の呼称・表記については議論のある所だが、今は立ち入らない。なお、当時の語感を伝えるために、「生蕃」「蕃人」等の表記を使用する。

(11) 井上理恵「日本統治で生まれた川上の演劇」「台湾鬼退治」「オセロ」、『生蕃討伐』（吉備国際大学社会学部研究紀要）第十九号、二〇〇九年三月）は当時の劇評をもとに「川上の世界」を検討している。井上は触れてい

ないが、「台湾鬼退治」は内容、登場人物などから案ずるに「朝日新聞」(東京)に一八九五(明治二八)年十二月七日から十九日まで八回にわたって連載された「今様鬼退治」を翻案したものであろう。「生蕃討伐」については劇評を見る限り「生蕃」の討伐そのものが劇の主題ではないようである。もとした原作があるか否かは今の段階では詳らかにしない。

(12) 「生蕃」と題する単元が文部省著作『高等小学読本』第四第十六課(一九〇四(明治三七)年二月)に取り上げられている。

(13) 帝劇五月狂言合評(下)、『読売新聞』一九一三(大正二)年五月十日(朝刊)は「八十人からの俳優が舞台に現われるといふ芝居も、見聞の狭い私はまだこの「生蕃襲来」以外に見たことがない」と伝えている。二幕目(其の一)、「首狩祝ひの踊り」から始まる場面には「生蕃男女子供大勢が登場する。

(14) 蕃界とは生蕃と普通人民との境界線にて許可なくては出入りを許されざる所なり(刊行本所載の「説明」より)

(15) 「陰勇とは本島人(支那人)にして年齢十七歳以上四十五歳以下の志願者中より採用する雇員にて七円より十五円以下の月俸を受け(食料は自弁)蕃務警官の命令に依り兵卒として進攻防戦の事に従ふ」(刊行本「説明」より)

(16) 『台湾日日新報』一九一三年一月三十一日、二月三日、二月一五日、二月一九日。

(17) 隘勇線は蕃界適宜の山嶺を開き道路(隘路)を設け隘蕃生息の方面数十分以内の草木を刈り蕃人襲来を監視する線なり(刊行本「説明」より)

(18) 『台湾生蕃種族写真帖附理蕃実況』成田写真製版所、一九二二(大正一)年十一月

(19) 飯田兼治郎『歌集女性は光る』白日社、一九三〇(昭和五)年十一月「二〇二頁」

(20) 『台湾製糖株式会社史』台湾製糖株式会社、一九三九年九月「一八三頁」注20に同じ。「一九三頁」

(21) 台湾到着後、『台湾日日新報』(一九一三年二月四日)の紙上、台湾に於いて乱立気味の製糖会社の合同問題について記者から質問された益田は明言を避けているが、将来的課題としては台北製糖との合同も意識されていたであろう。また、台糖が「蕃人」を労働力とするのは一九二一年から始まる南部の萬隆、大响農場開設工事からである(『社史』二一八頁)。ただし、すでに台東拓殖製糖会社は台東庁下でアミ族を小作として開墾をすすめており、「蕃人苦力」の労働力としての価値は注目されはじめた(『台湾日日新報』一九一三年二月十五日)。角板山の「模範耕地」見学は将来に向けて経営上の参考となったことは十分考えられる。

(22) 「植民地戦争と総督府の成立」岩波講座「近代日本と植民地」帝國統治の構造」一九九二年十二月「九一—一〇頁」

(23) 手島兵次郎『台湾制度大要』法院月報発行所、一九一〇(明治四三)年六月「一七頁」

(24) 『解剖せる台湾』昭文堂、一九二二(明治四五)年六月「一五七頁」

(25) 「佐久間総督談」『読売新聞』(東京)一九一一年九月二六日朝刊

(26) 『理蕃誌稿』第三篇上巻、一九二二(大正十)年三月「三六一頁」

(27) 「えんげい便」『朝日新聞』(東京)一九一三(大正二)年五月二二日朝刊

(28) 「帝劇の台湾劇」『読売新聞』(東京)「演芸」欄一九一三(大正二)年四月十九日朝刊

(29) 注27に同じ「五三頁」

(30) 注27に同じ「三九四頁」

(31) 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、二〇〇八年一月「八頁」

(32) 注32に同じ「九〇頁」

(34) 『拓殖博覧会事務報告』拓殖博覧会残務取扱所 一九二三（大正二）年二月「三、五頁」

(35) 注34に同じ「六三、六五頁」

(36) 「人類學雜誌」第二九卷二号、一九一四（大正三）年一月

(37) 注34に同じ「六三頁」

(38) 注34に同じ「二四〇頁」なお、この来賓の中には帝劇女優森律子の名前が見える。益田太郎も当然列席していたであろう。

(39) 注34に同じ「三三三頁」

(40) 「読売新聞」（東京）一九一三（大正二）五月三日朝刊

(41) 「隘寮とは隘勇の屯所にして隘勇線三四丁毎に設けらる、隘寮四五箇所の内一ヶ所を監督分遣所とし巡查又は巡查補を配置し四五ヶ所の分遣所毎に監督所を置き警部又は警部補駐屯す」（刊行本「説明」より）

(42) 注27に同じ「三〇六頁」

(43) 注18に同じ。頁は打たない。「タイヤル族」の項に記載。

(44) 注32に同じ「四三頁」

(45) 富田哲「統治者が被統治者の言語を学ぶということ―日本統治初期台湾での台湾語学習」『言語と植民地支配』皓星社、二〇〇〇年十一月。

(46) 小山内薫「革新劇雑感」（中）『読売新聞』一九〇八（明治四一）年九月二七日（別刷）

(47) 注32に同じ「九七頁」

(48) 注32に同じ「二〇〇頁」。

(49) 『浜松市主催全国産業博覧会協賛会誌』全国産業博覧会協賛会、一九三二（昭和六）年十二月「八二―八五頁」

(50) 瀬川昌久「川田義雄の半生期」『川田晴久読本 地球の上に朝が来る』中央公論新社、二〇〇三年九月「五七頁」

(51) 注49に同じ「八九、九〇頁」

付記 査読に於いて大正、昭和の演劇史、特に浅草の「サロメ劇」などの関係、また、植民地アジアを舞台にして演劇を作る場合の特殊な事情まで踏み込んだ考察を求められたが、紙幅の不足に加えて論者の力不足によって論及できなかった。後日、別稿を期したい。なお、本稿執筆に於いて柳瀬善治氏から貴重な資料の提供を受け、多くの示唆に富む助言をいただいた。心より御礼申し上げます。

―おとしげ・まさふみ、広島大学大学院文学研究科博士課程前期在学―